

あき しょくぶつ 秋の植物

❀ ハギ

か らくようていぼく あき ななくさ
マメ科の落葉低木。秋の七草の1つでありますが、

ぶ け やしき がつごころ がつまつごころ とはな さ
武家屋敷では6月頃と9月末頃に2度花を咲かせます。

にほんさいこ わかしゅう まんようしゅう なか うた もっと おお よ
日本最古の和歌集「万葉集」の中でハギの歌は最も多く読まれており、その

かず しゅ しゅ じゅうごや
数は141首とも142首ともいわれています。また、十五夜

じゅうさんや つきみ だんご いっしょ そな
や十三夜の月見では、団子やススキと一緒にハギを供える

しゅうかん にほん でんとうぎょうじ みっせつ かんけい
習慣があり、日本の伝統行事にも密接に関係しています。

❀ モミジ・カエデ

か しょくぶつ しょくぶつぶんるい おな は
カエデ科の植物。植物分類上は同じですが、葉の

き こ ちが なまえ よ き
切り込みの違いで名前を呼び分けており、切り

こ ふか あさ
込みが深いものがモミジ、浅いものがカエデです。

こうよう かんしゅう ちみじが ひょうげん
紅葉を觀賞することを「紅葉狩り」と表現しますが、

ゆらい しょせつ ほんらい か ひょうげん
由来は諸説あります。本来「狩り」という表現は

しゅりょう いみ つか
狩猟の意味で使われ、それが木の実や果物を採ることに用いられるように

なりました。その後、平安時代には「狩り」をしない

きそく あらわ かれ しぜん め か
貴族が現れ、彼らが自然を愛でることを「狩り」と

たと せつ とき じっさい くさばな て と
例えたとする説、その時に実際に草花を手にとって

なが か ひょうげん せつ
眺めたことから「狩り」と表現した説などがあります。

↑カエデ